

## 戦間期の住宅の近代化と女性：婦人雑誌にみる建築家の住宅改良に関する言説

Modernization of House and Women During Interwar Period: The Architects' Discourse on House Improvement in Women's Magazines

芝浦工業大学 教授 松下希和

### （研究計画ないし研究手法の概略）

住宅の近代化における女性の役割・影響を明らかにする研究の端緒として、大正期に、建築家が婦人雑誌を通してどのような主張を発信したかに着目する。当初の研究計画は戦間期における女性を施主とする住宅とその影響について考察するものであったが、文献調査を主とした計画に修正し、婦人雑誌に掲載された住宅関連記事を中心に考察した<sup>1</sup>。分析の対象は、当時影響力が大きかったとされる四大婦人誌『婦人画報』『婦人倶楽部』『婦人公論』『主婦の友』に『婦人之友』を加えた5誌とする。これらの婦人雑誌において女性を施主とする住宅はどのように取り上げられたかを概観した上で、建築家や建築教育者が婦人雑誌を用いて直接女性にどのような働きかけをしたかを把握することにより、革新的な住宅のあり方を一般に普及させた婦人雑誌の役割の重要性と女性を施主とする住宅が出現する背景を明らかにする。

女性を施主とする住宅の事例としては、川上貞奴邸（あめりか屋、1920年）、三宅やす子邸（石本喜久治、担当：山口文象、1928年）、宇野千代・東郷青児邸（石本喜久治、1931年）吉屋信子邸（吉田五十八、1936年）、水之江瀧子邸（網戸武夫、1937年）、林英美子邸（山口文象、1941年）などがある。まず、5誌の創刊から日中戦争開戦の1937年まで、目次を基に、対象事例の建築家と施主に関連する記事を含む建築家の言説を収集する。さらに、1912年から1932年間の寄稿が頻繁にみられた伊東忠太、塚本靖、佐野利器、佐藤功一、大熊喜邦の言説を収集し、その意図について考察する。

### （実験調査によって得られた新しい知見）

中流住宅のあり方についての議論は、明治中期に始まるが、主に専門家の間に留まっていた。大正に入ると、国家の政策の後押しもあり、生活改善の官民の団体が設立された。これらは展覧会や講演、出版物を通して、住宅の近代化を普及させる活動を活発に行なっていたが、団体が「主婦」が生活改善の中心を担うと認識していたにも関わらず、会員に女性は少なく、対象者への作用は限定的であった<sup>2</sup>。

対照的に当時多くの女性読者を獲得し、影響力が大きかったのは婦人雑誌である。女性の教育や購買力の向上とともに、明治後半から大正にかけて発展した<sup>3</sup>。近代国家が「家族」という単位を再定義し、それを女性領域としたことにより、婦人雑誌が一般の生活の近代化に大きな影響をもたらしたことはこれまで様々な分野で明らかになっている<sup>4</sup>。本研究対象の施主である女性はこれらの雑誌に取材される側でありながら、同時に読者でもあり、記事は彼女たちの住宅観にも少なからず作用したと考えられる。

対象事例の設計者である山口文象、石本喜久治、吉田五十八、網戸武夫の婦人雑誌におい

ての言説は、対象の住宅のような特殊な事例についてよりも、住宅改良の考えに基づいた実践的で経済的な事例についての記事が多かった<sup>5</sup>。そして、そのような啓蒙的な発信は、その前の世代の建築家たちから始まっていることが明らかになった。建築家の考えが婦人雑誌に掲載された最初期の例としては、1901年4月の『女学世界』（曾根工学博士談の「日本の家屋」）が挙げられる。その後、生活改善を目指した建築家の寄稿が頻繁にみられることから、彼らが一般女性の意識改革を重要視し、団体の活動に留まらず婦人雑誌というメディアを通して直接女性に働きかけることが有効であると考えたことがわかる<sup>6</sup>。そこで本稿では、女性を施主とする住宅の設計者より前の世代の言説も含めて収集し、分析することにより、建築家の発信の場としての婦人雑誌の成立を明らかにする。具体的には、婦人誌への寄稿として初期のものひとつである1912年の佐藤功一による論考から、1932年の座談会までを対象とし、その間の寄稿が多数みられた伊東忠太、塚本靖、佐野利器、大熊喜邦の論考を主として考察する。

上記の5名のうち、大蔵省建築局に所属していた大熊以外は大学教育者であり、西欧文明を知る指導的立場から、様々な場面で協力しつつ、共に社会の近代化を進めていた<sup>7</sup>。塚本と大熊は1916年に、佐野と佐藤は翌1917年に「住宅改良会」（橋口信介）の顧問に就任した<sup>8</sup>。1920年に設立した「生活改善同盟会」（文部省の外郭団体）住宅改善調査会で佐野は委員長、大熊は委員に就任した。また、佐野は1920年に創設された「文化生活研究会」（森本厚吉など）に建築学者として参加していた。伊東は1915年に国民新聞社が主催した家庭博覧会に出展された「中流住宅」の設計を指導した<sup>9</sup>。大熊は1922年に開催された平和記念東京博覧会で住宅改善同盟会の作品として実物展示された住宅を設計し、それを含む14棟の住宅の展示場「文化村」の「村長」を務めるなどの活動も行なっていた。

これまで、住宅分野においては主に『婦人之友』を用いた詳細な研究により、婦人雑誌が住宅設計などを含む生活改善の提案の場として、積極的な読者の参加を引き出していたことが明らかにされている<sup>10</sup>。また、日本の住居学の観点から佐藤の婦人雑誌への住居に関する論考を論じた研究<sup>11</sup>がある。他にも、佐野の雑誌に掲載された住宅改良に関する言説についての研究<sup>12</sup>が行われているが、婦人雑誌は含まれていない。本研究は、婦人雑誌というメディアで、5名の指導的立場にあった建築家が発表した論考を、個々の主張だけでなく複合的に分析することにより、彼らが生活者である一般の女性たちにアウトリーチを試みた論述と姿勢を明らかにする。

## 分析対象にみられる住宅改良思想

### 1. 各建築家による記事の傾向：

対象の5誌より収集した住宅に関する1912年～1932年の記事は、伊東が10編、塚本が7編、佐野が8編、佐藤が33編、大熊が16編と佐藤が圧倒的に多い（表1）。佐藤は1921年に東京女子高等師範学校の講師となり、1925年には日本女子大学住居学科の兼任教授に着任したことに表れるように、家庭の代表者である女性には総合的な住教育が必要と考えており<sup>13</sup>、普及力の強い婦人雑誌を積極的に用いたと考えられる。商業婦人誌には『婦人之友』や『婦人公論』等の「女性思想・評論誌」、『主婦之友』、『婦人倶楽部』等の「生活実用誌」などの位置づけの差異が存在しているが<sup>14</sup>、本研究の対象記事としては、『婦人画報』がもっとも多い39編、続いて『婦人之友』の16編、『婦人倶楽部』の11編と雑誌の位置付けによる偏りはみられなかった<sup>15</sup>。佐藤は『主婦之友』以外の4誌に、特に1921年～1932年までは毎年記事がみ

表1：婦人雑誌5誌に掲載された対象建築家の住宅関連記事

和暦	西暦	伊東忠太(1892年卒)	塚本靖(1893年卒)	佐野利器(1903年卒)	佐藤功一(1903年卒)	大熊喜邦(1903年卒)	
		誌名 論考タイトル	誌名 論考タイトル	誌名 論考タイトル	誌名 論考タイトル	誌名 論考タイトル	
M36	1903		「住家の話」				
M45	1912				画報 6.将来の日本の住宅はどうなるか		
T元					画報 7.不完全な日本の住宅		
					画報 9.世界で最も便利な台所		
					画報 10.世界で最進歩した台所		
T4	1915	婦人	2.應接間の装飾				
T5	1916	住宅改良会(橋口信助)顧問 塚本、大熊、武田五一 1917年には佐藤、佐野も加わり顧問14名				『報知懸賞・住家設計図案』編	
		公論 7.住宅の改良	画報 10.住宅を改良するとしたら				
		婦人 8.中流の住宅は如何に設計すべきか					
		画報 10.現代に適應した住宅					
T6	1917	画報 8.中流向の郊外住宅園	画報 3.西洋の女中と日本の女中		白茅会(民家研究)柳田国男		
		公論 6.家賃は高く出せ					
		画報 11.室内の色の配合					
T7	1918		婦人	7.住宅の換気設備			
T8	1919	日本建築学会「都市と住宅の問題」講演会：生活改善同盟会：佐野(委員長)、田辺淳吉(副委員長)、大熊 文化生活研究会：佐野					
T9	1920			「文化生活研究」に「住宅論」連載		婦人 4.今後の住宅は何なるか	
						婦人 6.出来合住宅、組立家屋	
T10	1921	公論 7.耐火住宅を作れ	画報 10.出入に便利な三角形を利用した門	文部省「住宅改善講演集」	東京女子高等師範学校 講師	婦人 1.文化的の煥然設備	
				画報 4.綺麗を飾るより快い住宅を	画報 2.日本の住宅は結局どうなる		
T11	1922	平和記念東京博覧会 建築学会住宅展示 実行委員長 田邊淳吉 生活改善同盟会の出席設計 大熊 審査員 伊東					
		画報 2.住の趣味を尊重せよ			婦人 8.住宅建築に現はれたる時代の姿	画報 8.室内を美化する壁の話	
		画報 9.文化生活に適する家一能率と家			画報 9.文化生活に適する住宅一文化観と住宅観	画報 12.新しい台所の設計と設備	
T12	1923	主婦 1.生活の洋風化を如何に見るか	画報 2.最も暖かに快よする暖房装置	画報 1.私の理想的児童室	画報 1.子供室に就いて	画報 1.文化生活に適する住宅	
				クラブ 4.都会生活に適する住宅の作り方	公論 1.住宅を中心としての生活改善論-衣食住の問題	画報 11.震災後の住宅の手入れはどうするか	
				画報 7.鉄筋コンクリートの私の家	クラブ 6.応用自在な窓の話		
				クラブ 10.大震災の及ぼした建築物の改革と耐震耐火住宅の建て方	婦人 11.木造住宅の耐震的構造		
				画報 10.震災にはどんな住宅が最安全か			
T13	1924	生活改善同盟会：「住宅家具の改善」					
		婦人	2.新時代の家庭における言葉		画報 1.住宅の二つの様式	画報 3.縁側からベランダへ	
					画報 8.夏の家		
					婦人 9.夏涼しい家		
T14	1925			『住宅論』	日本女子大学住居学科兼任教授	画報 9.新しい住宅への試み	
S元	1926			画報 5.新時代の客間	画報 1.住宅の照明	画報 1.家庭団樂の層間とその設備	
				第一回家庭經濟講習會講演集：「住宅の改善」	画報 3.住宅各室の照明法	画報 10.家を住みよくなる建具	
					クラブ 5.建築上から見た家相と方位		
S2	1927				画報 4.片窓録	画報 1.和宮様の御住居	
						画報 4.昭和は住宅の創造時代	
S3	1928				婦人 4.『住宅』についての座談會	婦人 10.臺所の設計に見られる新傾向	
					婦人 4.設備を主とした家		
					画報 5.緑先の塙と蔓棚蔓垣		
S4	1929				画報 2.我が家の家賃	主婦 6.老人も一緒に住める文化住宅	
S5	1930				婦人 11.建築 新しい建築		
S6	1931				公論 1.十三坪の家		
					クラブ 1.衛生と家事の能率を主眼とした小住宅		
					クラブ 1.建築常識		
					クラブ 2.洋風の長所を採り入れた住みよい住宅		
					クラブ 4.俵給生活者向の住みよい住宅		
					クラブ 6.夏を上手に過す座談會		
					クラブ 6.千五百圓以下で出来る子供本位の住宅		
					クラブ 10.應接室兼書齋を洋式とした和洋小住宅の設計		
S7	1932				婦人	1.座談會 コンクリート建築に対する正しい理解のために	

※『婦人公論』は「公論」、『婦人倶楽部』は「クラブ」、  
『婦人画報』は「画報」、『婦人之友』は「婦人」、  
『主婦之友』は「主婦」と略す。

られる。1931年には『婦人倶楽部』で読者設計競技の審査を連載で行なっている。伊東は『婦人公論』が創刊された年から寄稿し始め、1940年代まで『婦人之友』を中心に寄稿が続くが、住宅を主題とした論考は1920年代初頭までである<sup>16</sup>。佐野と大熊は生活改善同盟会設立後の1920年代に記事が集中している。佐野の論考の内容は基本的に彼の『住宅論』<sup>17</sup>と一致し、また彼が委員長を務めた生活改善同盟の住宅改善調査会の方針と共通する点が多い。

## 2. 共通の論点と相違点：

5名の建築家の共通の論点は、①西洋住宅の紹介・洋風化の推奨、②イス座式の推奨、③接客本位から家族本位の間取り、④衛生への配慮・機械式設備の導入、⑤防犯・防災、であり、国家の基礎である家庭に科学を導入することにより文明化するという国策に則ったものであった。ただ、詳細にみると個々が強調している点は異なる。

①住宅の洋風化に関しては、それぞれの建築家たちが洋行から帰国直後の論考には、日本の伝統家屋を否定し、急進的に生活の洋風化を勧める論調が多い。例えば、塚本靖は1902年に欧州留学から帰国後、1903年に「住家の話」<sup>18</sup>という論文を『建築雑誌』に発表している。

これは、塚本の工学会での講演記録であり、専門家による一般の住宅改良についての論考の初期のものであったが、塚本は美的面、計画・構造・設備面・経済面のいずれも日本家屋は劣っていると主張し、早急な改善を促している。一方、佐藤も1910年秋に欧米の留学から帰国後、1912年に立て続けに4篇の論考を『婦人画報』に発表し、構造、設備、衛生面における日本住宅の後進性を批判するとともに、10月の記事では米国の台所の合理的な設計を詳細に図入りで紹介している<sup>19</sup>。佐藤の台所仕事を効率化する具体的な設計への関心が窺われるが、当時専門家の発表の場として主流であった『建築雑誌』には調査の報告は発表しておらず、『婦人画報』というメディアを通して直接利用者である婦人に報告をしていることが興味深い。

塚本は「住家の話」では全面的に洋風化を勧めているが、その論考から10年以上経過した後の婦人雑誌への寄稿では、日本の生活習慣の美点を認め、和洋折衷の住宅にも寛容な論調に変わっている。塚本と同世代の伊東も二重生活を容認しているのに対して、若い世代の佐野・佐藤・大熊はより強く住宅の洋風化を勧めている。

②イス座に関しても、世代間の違いがみられ、後者はより全面的にイス座を推奨している。佐野は「椅子は、男には好いが、婦人には好くないと云ふ考の人もあるが、これは、却って、婦人に対しては、最良の引倒しと云ふべきである。かう云ふ忠言(?)には婦人の方から、断るべきである。〈中略〉一日中、外で働いて帰ってくる男子よりも却って家にいる婦人に向かって椅子生活をお奨めしたいのである。<sup>20</sup>」と受け手を意識した書き方をしており、同様の表現を『住宅論』、1921年生活改善講習会での講演「生活改善」、1924年家庭経済講習会での講演「住宅の改善」でも繰り返し用いている。

畳についても意見が分かれる。佐藤は洋行から帰国直後の1912年の論考では、「畳の上は黴菌の巣窟<sup>21</sup>」と畳を否定しているが、1921年の論考では、靴を脱いだ足で踏むのに心地よい「日本の畳は進歩した敷物<sup>22</sup>」と認識を改め、畳の上に椅子を置く生活を推奨している。畳への考え方の変化は1917年に柳田國男らと白芽会を結成し、民家研究を始めて、風土に合った生活を再評価した影響が考えられる。

一方、佐野と大熊はイス式の床材に防湿効果のあるコルクを推奨している。両名が委員を務めた「住宅改善調査委員会」が出版した『住宅家具の改善』においても「4.床に畳を敷くことは廃し度い<sup>23</sup>」という一節が設けられており、二人が共通して持っていた主張が反映されたと考えられる。佐野は畳敷きではどこでも寝転ぶことができるので、住宅を「身心墮落の場所」にすると述べ、畳にコルク板を敷き、その上でイス式の生活を勧めている。佐野の畳否定は、東京市の復興小学校の設計の際に、学校長などから求められた畳敷の作法室（主に女子生徒に作法を教える部屋）を拒否したことに現れるように、合理主義に基づいた形式の否定である。教育家への反論として佐野は、「床の間が無ければ作法が出来ないと云ふようなことはない。殊に女に必要なだ、女は優しくなければならぬ、と言ひますけれども、男に必要なでないことは女にだって必要でない<sup>24</sup>」と述べており、それまで当然のように女子生徒にのみ課せられていた作法教育の場を、非合理的であると除去したことで、性別役割分担意識の軽減に寄与したと考えられる。

③家族のための居間を住宅の中のもっとも日当たりが良く広い場所にするべきであるという主張は共通しているが、客間については、佐野のみが中流以下の住宅には特別な理由が無ければ不要と主張しており、戦間期においては未だ接客や格式が重要視されていたことがわかる。また、佐野や佐藤は「住宅は家庭の容器」と呼び、佐野は住宅の計画にはまず育児

のためを考える必要があり、乳母がいるような上流階級以外は「子供室」を特別に設けるのではなく、家全体を子供室と考えるべきと主張し、佐藤もそれに同意している。

④衛生・設備に関しては、南面採光など平面の計画だけでなく、各種機械設備についての具体的な説明がなされているものも多い。特に照明・暖房・換気に関わる各部について、論考が多くみられるのは佐藤・大熊である。佐藤は民家研究の影響からか、風土と住まいの観点から快適に過ごす対応策が提示されている記事が多く、気候によって移動する住居など大胆な提案も行われている。また、全般に主婦の関心が高かった台所の面積を広く取り、住宅の中で最も近代化すべき部屋と位置づけた記事も多い。

⑤防犯・防災に関しては、伊東は1920年以前の論考では耐火は重要だが、住宅は一代限りのものであるからRCやレンガ造などの耐久性のある材料を使う必要はない、と主張していたが、1920年頃には各氏がRC造を推奨するようになった。佐野は1922年末に竣工したRC造の自邸を建築専門誌の発表に先立って『婦人画報』<sup>25</sup>で発表している。関東大震災直後には特に佐野・佐藤が、具体的な各構造の特徴と建設費を比較しながら、住宅を耐震耐火化するRCの優位性を説く論考を一般雑誌だけでなく、婦人雑誌にも寄稿している<sup>26</sup>。しかし、日本最初のRC住宅が前述の佐野自邸であり<sup>27</sup>、一般には浸透していなかったばかりか、RC造の復興小学校ができたことで、RC造の課題も顕在化し、RC造に抵抗する論調も生まれた。『婦人之友』はそのような状況の中、1932年に「コンクリート建築に對する正しい理解のために<sup>28</sup>」と題した座談会を開催し、佐藤と大熊が出席した。ここでは、RC造が木造に比べて、換気、採光が不十分で、夏暑く冬寒いという環境面と、壁に反射した音が神経を刺激する、圧迫感があるという精神面からの問題が提起された。そこで、RC推進派の佐藤・大熊と内田祥三は自宅やその一部をRCで建設した自らの経験を紹介し、反論している。大熊はRC造の書斎とその他の木造の部屋の温度を計測したグラフを提示し、RC造では夏の夕方窓を開けておくと涼しいなど、具体的な説明をしてRC造にはそれに相応しい住まい方が必要であることを説いている<sup>29</sup>。環境面に関しては、断熱層や断熱材を用いた改善方法が提示された一方、住まい方や心理面において一部の出席者からの抵抗が示されたまま、座談会は終了しているが、佐藤・大熊・内田と、この座談会に出席していなかった佐野も含め、都市住宅は耐震耐火性能のあるRC住宅が長期的にもっとも有効で経済的であるという主張は一致しており、互いに協力して啓蒙活動を行っていたことがわかる。

## おわりに

大正初期から、当時建築界の主流であった佐藤功一、伊東忠太、塚本靖、佐野利器、大熊喜邦といった建築家が婦人誌に主に住宅に関わる啓蒙記事を寄稿し、その内容は多岐にわたることがわかった。記事の基本的な目的は、国家の政策に則る住宅改良の啓蒙にあるが、それぞれの記事に建築家個人の体験や思想が反映しており、女性に向けて発信する工夫がみられる。また、一般の住宅に設備や構造のような科学を持ち込む役割を果たしたと考えられる。

これらの建築家たちが大正初期から積極的に当時先進的な住宅の考え方を一般の女性に広める活動を行ったことで、1920年代半ばから1930年頃に、吉田五十八や山口文象など次世代の建築家が婦人雑誌を活用する背景がつくられた。彼らは前世代が唱えた生活改善の論点を前提としつつ、実際の住宅の設計者として、より具体的なアイデアを直接住まい手である女性たちに披露した。その上で、「昼のない数寄屋」吉屋信子邸（吉田五十八）のようなより先駆的な住宅が発信されたことにより、一般読者のあこがれを醸成する場が確

立した。同時期の婦人雑誌にはあめりか屋の橋口信介らのような設計施工者や三角錫子のような家政学の教育者も多く寄稿したが、建築の教育者であり、住宅改善の指導者が直接住まい手に伝えようとしたことの意義は大きい。

## ( 発 表 論 文 )

- ・ Kiwa Matsushita, “Reinventing a traditional Japanese Sukiya house to be non-patriarchal,” Society of Architectural Historians Virtual Conference 2020, April 30, 2020.
- ・ 松下希和「吉屋信子邸におけるメディア掲載記事と設計意図の関係について」『2020 年度大会（関東）学術講演梗概集』日本建築学会 2020.9.
- ・ （今後発表の予定）松下希和、田中厚子、赤澤真理「戦間期の婦人雑誌にみる建築家の住宅改良に関する言説とその特徴」『2021 年度大会（東海）学術講演梗概集』日本建築学会

<sup>1</sup> 感染症の影響により現地調査や一次資料の収集が困難となった。

<sup>2</sup> 久井 英輔「大正・昭利初期における社会教育のメディアと読者の関係性」『生涯学習・社会教育学研究』第 27 号 2002.

<sup>3</sup> 浜崎廣『女性誌の源流』出版ニュース社, 2004.

<sup>4</sup> 小山静子『家庭の生成と女性の国民化』勁草書房 1999 など.

<sup>5</sup> 対象の住宅に関する建築家の記事としては、網戸武夫「ターキーの新居訪問」『婦人公論』1937.4, 吉田五十八「新しい数寄屋」『婦人画報』1938.5 などがあるが、少数に留まる。

<sup>6</sup> 住宅だけでなく、男性の専門家による生活の近代化についての啓蒙記事は、婦人雑誌に多く掲載された。

<sup>7</sup> 佐野、佐藤、大熊は共に伊東と塚本に学んだ大学の同期で、公私ともに親しい交流があったことが知られている。

<sup>8</sup> 内田青蔵「『住宅改良会』の設立について」日本建築学会論文報告集 第345号1984.11.

<sup>9</sup> 内田清蔵『日本の近代住宅』鹿島出版社 1992. P.76 設計は遠藤新。

<sup>10</sup> 久保加津代『都市「中流住宅」における生活者の住居観と住生活改善：大正期を中心とするデモクラシー期の「婦人之友」誌の分析をとおして』博士論文、奈良女子大学 1995.

<sup>11</sup> 石井菜生「アメリカの'Housing'の変遷と日本の住居学における建築設計計画学的思考の生成に関する考察」日本建築学会計画論文集 第 599 号 2006.1. pp.189-196.

<sup>12</sup> 竹内孝治、小川英明「雑誌掲載論考にみられる佐野利器の住宅改良思想とその変遷—佐野利器の住宅改良思想に関する研究・その 1—」『日本建築学会東海支部研究報告書 第 47 号 2009.2.

<sup>13</sup> 石井菜生、前述 p.192.

<sup>14</sup> 岡満男『婦人雑誌ジャーナリズム』現代ジャーナリズム出版会 1981.

<sup>15</sup> 『主婦之友』は記者が取材した記事を掲載する方針が強く、寄稿記事が少なく本研究の対象記事も 2 編に留まる。

<sup>16</sup> 住宅や建築のテーマ以外では特に伊東・佐野・佐藤は婦人雑誌に 1940 年代まで登場している。一般的なテーマについて、各専門家が答える形式の記事に名士として回答している他、座談会に出席した記事も多い。

<sup>17</sup> 佐野利器『住宅論』文化生活研究会 1925.

<sup>18</sup> 塚本靖「住家の話」『建築雑誌』1903.

<sup>19</sup> 佐藤功一「世界で最も進歩した基所」『婦人画報』1912.10. pp.77-79.

<sup>20</sup> 佐野利器「都会生活に適する住宅の作り方」『婦人倶楽部』1923.4.p.258.

<sup>21</sup> 佐藤功一「将来の日本の住宅はどうなるか」『婦人画報』1912.6.p.48.

<sup>22</sup> 佐藤功一「日本の住宅は結局どうなる」『婦人画報』1921.2. p.17.

<sup>23</sup> 住宅改善調査委員会『住宅家具の改善』1924. p.83.

<sup>24</sup> 佐野利器「住宅の改善」『第一回家庭経済講習会講演集』1926. p.61.

<sup>25</sup> 佐野利器「鉄筋コンクリートの私の家」『婦人画報』1923.7. 『建築世界』での発表は同年 8 月。

<sup>26</sup> 佐野利器「大震火災の及ぼした建築物の改革と耐震耐火住宅の建て方」『婦人倶楽部』1923.10. 佐野利器「震災にはどんな住宅が最安全」『婦人画報』1923.10. 佐藤の論考は本研究の対象雑誌に掲載されたものではないが、佐藤功一「地震も火事も怖くない家の建て方」『婦人世界』1923.11. 佐藤功一「地震にも火事にも耐へる家屋を建てよ」『家庭雑誌』1923.11. など。

<sup>27</sup> 秋谷由佳、藤谷陽悦「佐野のコンクリート造住宅について」『日本建築学会大会学術講演梗概集』2002.8.

<sup>28</sup> 「専門家による座談会：コンクリート建築に対する正しい理解のために」（内田祥三、大熊喜邦、大西清治、岡田道一、北村耕造、北澤五郎、今和次郎、佐藤功一、武富英一、中村寛、森井健介、土浦亀城、土浦信子、濱田稔）『婦人之友』1932.1. pp.182-193.

<sup>29</sup> 『婦人之友』の座談会で提示されたグラフは大熊喜邦「鉄筋コンクリートの家屋に御住まゐの方々特に御家族の方々へ」『建築雑誌』1929.9. にも掲載され、同様の主張がされている。